

めざす児童生徒像

- ・まわりの人を思いやり、協力してよりよい社会を創る子
- ・夢や志をもち、自ら考え、挑戦する子
- ・ふるさとに誇りをもち、発展に貢献する子

※児童生徒結果・教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果 (%)			※差	達成状況の分析	改善策
				教員	児童生徒	保護者			
(学校で設定)	児童生徒が主役となる学校づくり	①②③共に100%	① 学校生活が充実している。	100 A:33.3 B:66.7	95.4 A:55.5 B:39.9	85.7 A:52.6 B:33.1		①②③どの項目においても肯定的評価は80%は越えたが、100%の達成には至らなかった。また、教員・児童生徒・保護者どれもA回答よりもB回答の方が多く、全体的に充足感を持ち、安定した学校生活を送り、その実感は得ているものの、深い達成感には至っていない様子が伺える。	昨年度から継続している項目であるが向上が見られていないことや、取り組みの源であるべき教員のA回答が低いことから、2学期以降の取組の具体化とその価値づけが必要であると考え。各成長段階に応じたの取り組み方を例示したり、行事ごとの意識づけを行ったりしていく。
			② 児童生徒会活動や行事に主体的に協力し合って取り組んでいる。	94.4 A:50.0 B:44.4	96 A:58.4 B:37.6				
			③ 学校をよりよくするために考えて行動している。	94.4 A:22.2 B:72.2	90.2 A:42.2 B:48.0				
			集計						
目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果 (%)			※差	達成状況の分析	改善策
				教員	児童生徒	保護者			
重点項目	業務の改善	④を100%	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	72.2 A:33.3 B:38.9				④の100%は達成ならず、他項目も十分とは言えない結果である。どの項目においても、意識して取り組んでいる様子は見られたが、状況の改善の実感が得られていないためだと考える。別紙アンケートによる個人目標の自己評価はAB評価が47%だった。時間外勤務時間の状況(4~6月)を見ると、昨年度約65hだったが、今年度は60.5hであった。	職員一人一人、達成に向けて意識をもっていることをまず評価し、経験を礎に働き方の改善をしていくことが自分自身の力になっていくことを伝えるとともに、分掌を生かし、組織的に動くように主任に働きかけていく。個人の目標退校時間について目標の見直し、振り返りを継続的にやっていく。
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	83.3 A:44.4 B:38.9					
			③ 各部内の協力体制により、働き方の改善を目指している	66.7 A:16.7 B:50.0					
			④ 目標退校時間を守るよう心がけている。	72.2 A:22.2 B:50.0					
			集計						
目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果 (%)			※差	達成状況の分析	改善策
				教員	児童生徒	保護者			
小松市共通重点項目	学校研究	①を100%	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	94.4 A:38.9 B:55.6				①は達成状況が高くなっているが、Aの回答率が低い。どこまでできていればA基準なのか、各レベルの基準を周知できていなかったためと思われる。	2学期前の職員会議において、判断基準を提示し共通理解を図れるようにする。また、学期末の教員アンケートでは、①の項目について文章で記入してもらい、3つの取組のどこが弱いのか具体的に見えるようにする。
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	94.4 A:50.0 B:44.4					
			集計						
	指導力の向上	⑤の児童生徒を100%	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	88.9 A:22.2 B:66.7	91.9 A:47.4 B:44.5			⑤はAと答えた教員が22.2%、Bと答えた教員が66.7%であった。Aが11.1%と低いのは検証方法に不十分さがあったことが原因であると考えられる。	児童・生徒が自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりするために以下の取組を行う。 〈前期課程〉 ・算数科の授業において、児童自身が理解できたかどうか5段階評価で振り返りを行い、単元の始めと終わりの数値を比較してそれをもとに検証を行う。 ・活用記述問題に繰り返し取り組み、問題の採点後に児童に取組に対する振り返りをさせ、児童の達成感を把握する(国語科・算数科)。 〈後期課程〉 ・定期テスト後に分析を行い、正答率の低い問題を次のテスト、または単元間で取り上げ、生徒の理解度を検証する取り組みを行う。 ・以下の記入欄を分析シートに設けることで、検証を確実に行う。 ①分析シートに、正答率の低い問題の分析 ②1回目と解説後の比較結果 ・生徒、教員ともに変容を数値で捉えることができるようにする。
			② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	88.9 A:16.7 B:72.2	95.9 A:54.7 B:41.3				
			③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	72.2 A:5.6 B:66.7	87.9 A:41.6 B:46.2		15.7		
			④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	100 A:11.1 B:88.9	95.4 A:48.0 B:47.4		-4.6		
			⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	88.9 A:22.2 B:66.7	90.1 A:45.9 B:44.2		1.2		
			⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	94.4 A:55.6 B:38.9	98.3 A:79.8 B:18.5		3.9		
			集計						
	学力の向上	①②③④⑤⑥共に100%にする。	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	83.3 A:16.7 B:66.7				・③～⑥は肯定的回答は100%かそれに準ずる達成度で、取組への共通理解と実践が進んでいる。 ・①、②は概ね良好な数値ではあるがA評価が少ない。取組内容と方法が十分に周知されていないと考える。	・①について 一度に複数教科に関わる横断的なマネジメントは難しいため、2つの教科を関連させるマネジメントから取り組む。8月職員会議で1学期に実践されたカリキュラム・マネジメントの例を紹介し、担任や副担任に教科等を関連させた取組案を考えてもらい実践を進める。 ・②について 「みらい探究科」においては、編成・実施・評価して改善を図るPDCAサイクルを確立している。2学期以降、教育課程の編成や各校務分掌ごとの取り組みにおいてもPDCAサイクルをより意識してもらう。
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	83.3 A:22.2 B:61.1					
			③ 全職員で学力向上の取組の「実施状況の検証」及び「成果の検証」について、計画的に実行している。	94.4 A:44.4 B:50.0					
			④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	100 A:52.9 B:47.1					
			⑤ 一問分析の結果を基に授業の改善を行う。(前期)	100 A:45.5 B:54.5					
			⑥ 定期テスト等の記述問題の結果を分析し、授業の改善を行う。(後期)	100 A:55.6 B:44.4					
			集計						
	家庭学習	①「家で計画を立てて勉強している」100%にする。(3年生以上) ②「家庭学習で学習用端末を活用する」100%にする。 ③「家庭学習による成果を実感している」100%にする。	① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	88.9 A:22.2 B:66.7	72.7 A:35.3 B:37.4	63.4 A:21.6 B:41.8	-16.2	・①はC・D評価の児童が12名、生徒が26名いた。教員間の共通理解する内容の曖昧さや、家庭学習の時間確保や計画の曖昧さが、A評価の低さや保護者評価の低さにつながったと考える。 ・②はC・D評価の児童が13名、生徒が29名いた。 ・③A評価が全体の5割を越えたことはよい結果ではあるが、肯定的評価が前期課程は94%、後期課程は76%と差があった。	・①前期・後期の取組において共通理解することを明確にし、徹底を図る。また、計画を立てることが苦手な児童生徒には、学習時間の確保の仕方、ドリル2回目の取組、教科ワークの取り組み方などを伝えていく。後期課程は、生徒が計画的に学習に取り組んでいることを、定期テスト前に保護者にメール等で周知していく。 ・②Qubenaを有効に活用できるための準備(学習の時間の確保等)を整え、児童生徒に実践させていく。 ・③家庭学習を確実にこなさなかった児童生徒へのサポートを強化していく。
			② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	83.3 A:33.3 B:50.0	76.3 A:57.8 B:18.5				
			③ 家庭学習による成果を実感している。		87.9 A:51.4 B:36.4				
			集計						